

ファニー・バーニーの書簡に見る  
サミュエル・ジョンソン

向 井 秀 忠

---

松 山 大 学  
言語文化研究 第28巻第2号（抜刷）  
2009年3月

Matsuyama University  
Studies in Language and Literature  
Vol. 28 No. 2 March 2009

# ファニー・バーニーの書簡に見る

## サミュエル・ジョンソン

向 井 秀 忠

サミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson, 1709-84, 以下、ファニー・バーニーが呼んだ「ジョンソン博士 (Dr. Johnson)」と表記する) とバーニー家の関係は次のように始まった。まだ音楽学者としても無名であったチャールズ・バーニー (Charles Burney, 1726-1814) が、週二回刊行の定期刊行物『ランブラー (The Rambler, 1750-52)』誌の記事や『英語辞典 (*A Dictionary of the English Language*, 1755)』の刊行計画書の記事を読んで興味を持ち、1755年にまだ面識のなかったジョンソン博士に手紙を書き送った。この見知らぬ人物から送られてきた、『英語辞典』の出版の時期やその購入方法について尋ねる手紙に対し、ジョンソン博士は「このように自発的に申し出られた貴君の友情ほど私を感激させるものはありません」<sup>1)</sup>と返事を書いた。また、同じ手紙の中には、「貴君から友情を示された以上、私は永くそれに価すべく努めるつもりです」<sup>2)</sup>とも書き認めている。まったく面識もない自分からの不躰とも言える手紙に対し、そのような丁重な返信を受け取ったチャールズの感激がひとしおであったのは当然であろう。また、「あなたの賛辞はあり難かった。それが心からであったと信じるからだけではなく、褒めてくれる人が非常に少なかったからである」<sup>3)</sup>とジョンソン博士は二年後に改めてチャールズに書き送っている。このことから、このときに手紙を受け取ったジョンソン博士の側もその

---

1) ジェイムズ・ボズウェル、『サミュエル・ジョンソン伝1』, 中野好之訳, みすず書房, 1981年, p. 200.

2) 『ジョンソン伝1』, p. 200.

言葉の通りに大いに喜んだのであろうことは想像に難くない。こうして始まった両者の付き合いは、ジョンソン博士が手紙に書いた通りに長く親しく続くこととなった。

チャールズは、少年聖歌隊およびオルガン奏者として音楽教育を受けたが、ジョンソン博士に初めて手紙を書き送った頃には、イングランド東部の小さな町キングス・リン (King's Lynn) の教会でオルガン奏者を務める傍ら、音楽を教えたりもしていた。『音楽史 (History of Music, 1776-89)』全四巻や音楽関係の資料収集でまわったヨーロッパ諸国の印象記などを出版し、後にはオックスフォード大学から学位を授与されるなど、ロンドン社交界でも有名な存在になっていく。

ジョンソン博士と初めて直接に会ったのは、先の手紙を書き送ってから三年後の1758年のことであった。その後も二人の交際が順調に続いたことは、「非常に頻繁にストレイタムのスレイル邸へジョンソン博士を訪ね、何度も暖炉の火と蠟燭が尽きて、下男たちの忍耐力の限度を遥かに越えるまで起きていて、彼と長い会話を交わした」<sup>4)</sup> というチャールズの言葉を、ジェイムズ・ボズウェル (James Boswell, 1740-95) による『サミュエル・ジョンソン伝 (The Life of Samuel Johnson, 1791)』が記していることからわかる。また、1778年には、資料調査のためにオックスフォード大学のボードレアン図書館を訪ねようとしていたチャールズのために、ジョンソン博士は「疑いなく彼が各種の便宜と恩典の供与に充分応えられる人物」<sup>5)</sup> として推薦状を書いただけでなく、分野的にはあまり興味がなかったはずのチャールズの『音楽史』のために献辞付き序文として筆をふるってさえている。ジョンソン博士の好意はチャールズ本人にとどまらず、その息子が大学に入学するに際しては世話を頼んでやったりも

3) 1757年12月24日付の手紙から。引用は、石田憲次、『ジョンソン博士とその群』、研究社、1933年、pp. 105-106。なお、引用に際しては、読みやすくするため、必要に応じて旧仮名を新仮名遣いに改めた。

4) ボズウェル、『ジョンソン伝2』、中野訳、みすず書房、1982年、p. 175。

5) ボズウェル、『ジョンソン伝2』、p. 548。

しているなど、両家が親しく付き合っていたことを窺わせる挿話には事欠かない。

ジョンソン博士がソーホーにある「トルコ人の頭亭 (Turk's Head, Soho)」で主宰していた非公式な集まりである有名な「文学クラブ (Literary Club)」にはオリヴァー・ゴールドスミス (Oliver Goldsmith, ? 1730-74) やエドモンド・バーク (Edmund Burke, 1729-97) をはじめとする多くの著名人が出入りしていた。チャールズも 1784 年頃から出入りするようになったとされ、ジョンソン博士の死後にもしばらくは顔を見せていた。ジョンソン博士の死に際しては、『ジェントルマンズ・マガジン』誌に追悼記事を寄稿し、その中でジョンソン博士の伝記を執筆する計画を発表しているものの、結局、他にも同様の企画のあることを聞いたために実行には移さなかったとされる。

チャールズは、先妻エスター (Esther, 1723-62, 旧姓 Sleep) との間に 9 人、後妻エリザベス (Elizabeth, 1725-96, 旧姓 Allen)<sup>6)</sup> との間に 2 人、合計 11 人という子沢山であった。ただし、ジョンソン博士との関係で注目すべきは、次女のフランシスであろう。フランシス・バーニー (Frances Burney, 1752-1840, ファニー (Fanny) の名前がよく知られているため、以後、正式名ではなく、ニックネームの「ファニー」と呼ぶこととする) は、父親が高名であったことから、幼い頃から、例えば、俳優のデイヴィッド・ギャリック (David Garrick, 1717-79) や肖像画家サー・ジョシュア・レノルズ (Sir Joshua Reynolds, 1723-92) などの当代一流の有名文化人との交際の輪の中にいた。彼女は、26 歳の 1778 年には、処女作となる書簡体小説『エヴェリーナ (Evelina, or a Young Lady's Entrance into the World, 1778)』を匿名で発表する。その後、『セシリア (Cecilia, or Memoirs of an Heiress, 1782)』、『カーミラ (Camilla, or a Picture of Youth, 1796)』などの社交界小説を書いた後、やや趣の異なる最後となる小説

---

6) エリザベスとの再婚は先妻エスターの死から五年後の 1767 年。そのとき、エリザベスには先夫との間にすでに娘二人と息子一人の三人の子供がいた。

『さまよえる女 (*The Wanderer, or Female Difficulties*, 1814)』を発表した。これらの作品が、ジェイン・オースティン (*Jane Austen*, 1775-1817) をはじめとする後世の女性作家たちに大きな影響を与えたことはしばしば指摘されている。また、1832年には『バーニー博士の思い出の記 (*Memoirs of Dr. Burney*)』として父親についての回想録をまとめて出版したほか、彼女が書き記した日記や手紙は、彼女の生きた時代を生き生きと後世に伝えるものとして高く評価されている。

小説家としての活動のほか、1786年から1791年にかけて、シャーロット女王 (*Queen Charlotte*, 1744-1818) の衣装係 (*Keeper of the Robes*) として宮廷にも入ったが、この仕事に気質が合わなかったこともあって五年でその職を辞している。また、1793年の41歳のときには、革命を逃れて来英していた二歳年下の亡命フランス人のアレキサンドル・ダブレー (*Alexandre d'Arblay*, 1754-1818) と結婚したことから、イギリス本国の対岸で起こっていたフランス革命の騒動を間近に経験することになる。そのときの経験が最後の作品『さまよえる女』に反映されている。

そんなファニーがジョンソン博士に初めて会ったのは『エヴェリーナ』出版の前年の1777年のことで、以後、「可愛いバーニー (“*dear little Burney*")」と呼ばれ、ジョンソン博士や彼と親しかったスレイル夫人 (*Mrs. Hester Lynch Thrale*, 1741-1821) に可愛がられ、スレイル夫人の邸宅であるストレイタム・プレイス (*Streatham Place*) を頻繁に訪れるようになる。ジョンソン博士は、小説家としてもファニーを高く評価し、例えば、「リチャードソンは本当に彼女を恐れたであろう。『エヴェリーナ』には彼の辛抱出来ないいい所がある。…ハリー・フィールディングもまた彼女を恐れたであろう。ハリー・フィールディングの作品全体の中には『エヴェリーナ』のような繊細な所が少しもない」<sup>7)</sup>と、有名な作家であったサミュエル・リチャードソン (*Samuel Richardson*,

---

7) 石田, pp. 545-546.

1689-1761) やヘンリー・フィールディング (Henry Fielding, 1707-54) などを引き合いに出して激賞していることは有名な話である。また、『ジョンソン伝』の1783年5月26日の部分には次のような記述もある。

五月二十六日月曜日、私（ボズウェル）は彼（ジョンソン博士）がお茶を飲んでいるところを訪問した。『エヴェリーナ』と『セシリア』の著者として高名なバーニー嬢も居合わせた。私は彼に、もしも政府の官職を獲得する機会がないならば議会で演説する者がいるだろうかと訊ねた。ジョンソン、「いるとも、君。君自身は何故にここで語るのか？ 人を教え樂しませる博愛な動機か、それとも功名を立てようとする利己的な動機からだ。」私は『セシリア』を話題にした。ジョンソン、(満足そうに生き生きして)「君、『セシリア』の話ならばもっと続けていい。」<sup>8)</sup>

彼女の作品は現代の読者の楽しみにも十分に耐えうるものであるが、ジョンソン博士のみならず、バーク、レノルズ、エドワード・ギボン (Edward Gibbon, 1737-94)、リチャード・ブリンズリー・シェリダン (Richard Brinsley Sheridan, 1751-1816) などにも褒めていることから、出版当初から高く評されていたことがよくわかる。

ボズウェルの『ジョンソン伝』はファニーについてあまり多くのページを割いていないものの、この有名な伝記が語る以上にジョンソン博士自身は彼女との付き合いを大切に思っていた。1781年には、ジョンソン博士は「彼女がいなければ生きてはいけない」<sup>9)</sup>とさえ漏らし、亡くなる前年には「すべての可愛い女性の中でも一番の存在」などと、ファニーに対しては終生思い遣りを示していたことがわかる。ボズウェルが書いた伝記に彼女があまり登場しない理

---

8) ボズウェル、『ジョンソン伝1』, p. 252.

9) パット・ロジャーズ、『サミュエル・ジョンソン百科事典』, 永嶋大典訳 (東京: ゆまに書房), p. 36.

由として、ファニーがこの伝記執筆者の押しの強さに閉口していた様子であったことがあったという（父親のチャールズもボズウェルに対しては同じように思っていたらしい）。

このように、親子二代にわたって、ジョンソン博士とバーニー家との親しい付き合いは続いた。この交際から、バーニー父娘が公私にわたって大きな影響を受けたことは確実であるが、同時に、この二人がジョンソンに与えることができたものも大きかったのではないだろうか。ファニーの観察力には定評があり、その書簡と日記は小説に負けず劣らず高く評価されており、書簡全集の序文には次のような一文がある。

In general one may say that it is in the Journal-Letters that one comes to see a characteristic Fanny Burney—her powers of observation, her extraordinary memory, her sense of occasion, her sense of fun, her industrious habits, and her powers of entertainment. (*Journals* I, xxxv)

本論では、ジョンソン博士に特に可愛がられたファニーが、書簡の中でジョンソン博士について実際にどのように書いているのかを確認し、両者あるいは両家の描かれかたについて考えていく。ファニーの日記での記述を中心にジョンソン博士の印象をまとめた同様の試みはすでに行われているが<sup>10)</sup>、第三者に書き送った文章を追っていくことにより、ここでは自分との会話である日記とは異なる表現形式において、どのようにジョンソン博士の印象が語られているかについて見ていきたい。書簡選集の序文には “She was not always, however, an objective journalist, a disinterested spectator; more often than not in these late years she was a participant in the action, a deeply feeling and suffering victim of

---

10) 例えば, Chauncey Brewster Tinker, *Dr. Johnson & Fanny Burney: Being the Johnsonian Passages from the Works of MME. D'Arblay*. 1911, rpt. Westport, CT: Greenwood Press, 1970.

political ambition, conquest, and war.”<sup>11)</sup> というコメントも見られるが、偏った観察者であるからこそその面白さがあるのではないだろうか。

十二巻にまとめられたオックスフォード版書簡全集<sup>12)</sup>の索引を用いながら、ファニーが書簡の中でジョンソン博士に触れた個所を拾い上げていくと、直接的な言及だけでも三十ヶ所にのぼる。日付は、1791年9月を皮切りに、1839年2月21日までを確認することができる。それぞれの書簡の宛先をまとめると、言及の多い順に、父親のバーニー博士 (Dr. Burney) 宛に10通、フリップス夫人 (Mrs. Phillips) 宛に5通、夫のダールビー氏 (M. d'Arblay) 宛に4通、サリー州のノーバリー・パーク邸のロック家 (The Lockes of Norbury Park) のウィリアム (William, 1732-1810) とその妻フレデリカ・オーガスタ (Frederica Augusta, 1750-1832) 宛に3通、ロック夫人 (Mrs. Locke) 宛に3通、弟で後にギリシャ古典学者となるチャールズ・バーニー (Charles Burney) 宛に2通、そして、アミーリア・ロック (Amelia Locke)、バレット夫人 (Mrs. Barrett)、チャールズ・ノーバリー・フィリップス (Charles Norbury Phillips)、シャーロット・ケンブリッジ (Charlotte Cambridge)、後にピアニストになる姉のエスター・バーニー (Esther Burney)、ジョン・ジェブ牧師 (Revd. John Jebb)、腹違いの妹のセアラ・ハリエット・バーニー (Sarah Harriet Burney)、ウォディントン夫人 (Mrs. Waddington)、ロングマン、ハースト、リーズ、オーム、そしてブラウン (Longman, Hurst, Rees, Orme, and Brown) に共同で宛てたものがそれぞれ1通ずつあるほか、その他の宛先不明なものが4通ほどある。それ

11) Joyce Hemlow, ed., *Fanny Burney: Selected Letters and Journals*. Oxford: Oxford UP, 1986, p. xix.

12) テキストに用いたのは、Joyce Hemlow, ed., *The Journals and Letters of Fanny Burney (Madame d'Arblay)*. Vol. I-XII. Oxford: Oxford UP, 1972-84. 引用に際しては、冒頭の数字が手紙の収録番号を示し、以後、手紙の書かれた場所、宛名とする本全集の記述をそのまま採用した。引用は *Journals* として、ローマ数字が第何巻かを、算用数字がページ数を示す (例えば、「*Journals* I, 64」は「書簡集第1巻の64ページ」を意味する)。また、どこで言及しているかがわかりやすいように、各引用中の「ジョンソン博士 (Dr. Johnson)」の部分には下線を付した。



では、年代順に具体的に手紙でジョンソン博士に言及している個所を見ながら論を進めていきたい。

まず、ジョンソン博士について一番最初に言及されるのは、フィリップス夫人宛の書簡の中で、次のように思い出を語る部分においてである。

5. Bath [*and Chelsea College*], September [to mid-October 9 1791  
To Mrs Phillips *and* The Lockes of Norbury Park

He (Richard Burke) imagined, I suppose, you were in St. Martin's Street, where he used to call upon you. In talking over your health, —the recovery of your liberty, —& of society, —he said if Johnson had been alive, your history would have furnished him with an additional, & interesting article to his *vanity of human Wishes*. (*Journals* I, 64)

次いで、同じくフィリップス夫人とノーバリー・パーク邸のロック夫妻に宛てた手紙の中で、先にも述べたように、ファニーがボズウェルを苦手としていたことに触れた後、ボズウェルとその友人がジョンソン博士のモノマネをしていたときに思い出した博士の言葉が引用されている。

24. [*Chelsea College*], June 1792  
To Mrs Phillips *and* The Lockes of Norbury Park

He (Boswell) entertained us all and as if hired for that purpose, telling stories of Dr. Johnson, and acting them with incessant buffoonery. I told him frankly that, if he turned him into ridicule by caricature, I should fly the premises : . . .

Mr. Langton had told some stories himself in imitation of Dr. Johnson ; but they became him less than Mr. Boswell, and only reminded me of what Dr. Johnson himself once said to me—‘Every man has, some time in his life, an ambition to be a wag.’ (*Journals* I, 182)

それでも、1793年8月30日付けの手紙でファニーの好きな本について列挙する中でボズウェルの『ジョンソン伝』も挙げざるを得ない。

122. Great Bookham, 30 August [1793]

To Doctor Burney

... & that M. d'Arblay repented his '*Shakesperian eagerness*'—no such thing ! We had not got 20 yards, before he discovered that he could admirably have brought my Toilette Table, which would have stood before me *as a Desk*, on which *Boyer, Guthrie, your History, Johnson's Lives*, & the favourite Books in my possession which he has heard me mention, might most conveniently have been placed. (*Journals* III, 2)

父親のバーニー博士に宛てた手紙の中で『エヴェリーナ』に言及し、頑張らねばと決意を新たにする個所でジョンソン博士について言及している。

171. Great Bookham, 18 June 1795

To Doctor Burney

I beg you take no notice *to the World* of what I say of abridging the work lest it should be thought I mean to gobble the subscription — — whereas, I have en [deavo] ured, like Dr. Johnson, *to do my best bound in honour* to return

them by [*tear*] thus circustanced. (*Journals* III, 121)

すぐれた手紙の書き手として、ローマの政治家・雄弁家・哲学者のマーカス・トゥリウス・キケロ (Marcus Tullius Cicero, 106-43 B. C.) やディノニシウス・ロンギノス (Dionysius Longinus, ?) と並べてジョンソン博士の名前を挙げている個所もある (“Neither Cicero, Longinus, nor Dr. Johnson ever wrote so exquisite a Letter.”, 190. [Great Bookham, 14 March 1796], *Conjointly with M. d’Arblay*, To Doctor Burney, *Journals* III, 163)。

1796年10月14日に書いたと思しき父親宛の手紙の中では、自分の作品が書評されることへの不安感や恐怖を記した後、すでに亡くなっていたジョンソン博士とサー・ジョシュア・レノルズ、そして病に伏していたエドマンド・バークらのことを懐かしく思い出している様子から、ファニーがこれらの人々にいかに精神的に頼っていたのかが察せられる。

204. Great Bookham, [14] October 1796

To Doctor Burney

But those immense Men whose single praise was Fame & Security, who established, by a Word, the two elder sisters, are now silent—Dr. Johnson & Sir Joshua are no more—& Mr. Burke is ill, or otherwise engrossed. (*Journals* III, 205-06)

1796年11月8日付の手紙には、一転して『エヴェリーナ』が好評のお蔭で、安心して次作の『セシリア』に取り組んでいることを説明した後でジョンソン博士に言及している。

211. Great Bookham, 8 November 1796

To Doctor Burney

It (The Monthly Catalogue) was circulated only by the general public, till it reached through that unbiassed [ママ] medium, Dr. Johnson—and thence it wanted no patron. (*Journals* III, 222)

結婚した相手がフランス人であるために十分な英語が話せない夫が、ジョンソン博士の辞書を常備していることについて次のように言及されている。

222. Great Bookham, 29 January 1797

*Conjointly with M. d'Arblay and Mrs. Locke*

To Mrs. Phillips ; *and* Amelia Locke to Charles Norbury Phillips

He (M. d'Arblay) still does not speak, except a few casual words, & 2 or 3 phrases, of which, however, he make the most that is possible, for he contrives to be understood as well as if all Dr. Johnson's dictionary was at his command. (*Journals* III, 263)

電話も電子メールもない時代には、遠方の知人とは手紙のやり取りこそが唯一のコミュニケーション手段であり、現代の電話のような役割さえ果たしていたことを感じさせる個所 (“... a Letter of so many dates is quite delicious to me—it brings me so close to you from Day to Day, that it seems nearest to verbal intercourse.”) の後に続けて次のようなジョンソン博士の言葉を引用している。

242. Great Bookham, 27 July 1797

To Doctor Burney

... & Dr. Johnson once said to me ‘No man passes through life without a desire, insome part of it, to be thought “a Wag”.’ (*Journals* III, 330)

ジョンソン博士を真似る人に対する批判として、下記のように書き記している。

292. West Humble, *Journal for* [June-pre 22 November 1798]

To Mrs. Phillips

It was a most agreeable surprise to me to find such a man in Mr. Professor Young, as I had expected a sharp, though amusing satirist, from his very comic, but sarcastic imitation of Dr. Johnson’s Lives, in a criticism upon Gray’s Elegy. This he sent me, many years ago, anonymously, with a note of extreme personal civility to myself, unsigned. Did you ever read? or do you remember it? — (*Journals* IV, 175)

また、この手紙の中では、『カーミラ』の印刷を担当した人物がジョンソン博士の友人であったことに触れたりもしている (“And we found it was the printer to the King, who is a Member of Parliament, son of the Andrew Straghan who was the friend of Dr. Johnson, and — — the principal printer of Camilla.”, *Journals* IV, 190)。

1799年3月14日付の手紙においては、ジョンソン博士が主宰する「文学クラブ」について次のような言及がある。

306. West Humble, 14 March 1799

To Doctor Burney

I am very glad at the revival of the club, & the nomination not only of *Mr. Canning*, but of a man of Letters not *M. P. besides*, *Mr. Marsden* ; for in a *Literary club*, honoured by having been instituted by Dr. Johnson, Learning, Letters, & talents should have the lead, & Rank, power, & Riches emulate one another to support them. (*Journals* IV, 253)

同年3月20日には、ヘスター・マライア・スレイルに宛てて、あまり考えすぎないようにと忠告する中でジョンソン博士の言葉を次のように引いてきている。

307. West Humble, 20 March 1799

To Hester Maria Thrale

*later* Viscountess Keith

Is it *inevitable* ? or would Dr. Johnson, if alive & knowing your situation, only say to you as he did to Mrs Reynolds ‘Ponder no more, Renny, — whatever you do it, but ponder no more ! —’ (*Journals* IV, 256)

その他、第4巻に収録されている書簡の中では、ジョンソン博士とスレイル夫人のところを訪れていたことを示す言及（319. West Humble, 2 May 1799, To Mrs. Locke, “...for we travelled back to Streatham, Dr. Johnson, and the Thrales”, *Journals* IV, 284）やフランス語で書かれている夫宛の手紙（378. [West Humble, 20 May 1800], To M. d’Alblay, *Journals* IV, 418）の中でもジョンソン博士に言及している個所がある。

父親に宛てた1801年頃の手紙の中にもジョンソン博士に対する敬愛を感じさせる次のような言及がある。

463. [West Humble, *post* 25 December 1801-January 1802]

To Doctor Burney

Your commission is arrived just as I am going to write my dear Chevalier, *I hope* for the last Letter upon this separation. But he is not certain yet of his return. What a dreadful fright the True Briton gave me one day last week, of a new *movement* in Paris! God keep all quiet there—but *him*, & may he be *restless* till he quits it! — I was going to begin a Letter to you the other day, in the fullness of my heart, to exult, with YOU, on a testimony of respect & veneration which are so highly honourable paid to the wisdom & authority of our so dear & revered Dr. Johnson, by the Lord Chancellor, in his reprimand Mr. Sheridan. I hope you had the same words I read? I was really *lifted up* by them. . . . (*Journals* V, 105-06)

また、1802年11月には、シャーロット・ケンブリッジに宛てた手紙の中においても、リチャード・オーウェン・ケンブリッジ (Richard Owen Cambridge) の死について触れた後、後に書き加えた部分に、ジョンソン博士に対する思慕の念を感じさせる次のような個所がある。

535. [54, rue Basse] Passy, November, 1802

To Charlotte Cambridge

This alludes to the death of Miss Cambridge's father, Richard Owen Cambridge, Esq., author of *A History of India*, of *Martinus Scriblius the Second*, if sundry gay pieces of poetry, and of many of the best papers in *The World*. He was a man of excellent parts, and peculiar talents: his understanding was as deep as his fancy was playful, and the solid worth of his character equalled the rare entertainment of his conversation. With him, and

with Mrs. Delany, and with Dr. Johnson, I had the high honour to become the reigning favourite of their latter days from the time of the discovery of the authorship of Evelina and with all three, I had the infinite happiness of being treated as their bosom friend and confidant to their last hours. What of pride, gratitude and joy did I not owe to them ! and what, in succession, of grief at their loss ! (*Journals* V, 392-93)

その他、ジョンソン博士、スレイル夫人、ファニーの三人で Gabriel Girard (1677-1748) の作品 *La Justesse de la langue francoise, ou les differentes significations des mots qui passent pour synonymes* (1718) を読んでいることが<sup>3</sup>, 1803 年 3 月 22~24 日付けの書簡に添えられた注釈の中で触れられている (542. [54, rue Basse] Passy, 22-24 March, 1803, To Mrs. Waddington, *Journals* V, 427-28)。また、同じ手紙の中で、ジョンソン博士が行った人物評価についても触れている (“Dr. Johnson’s opinion of her in those days did her (Sister Louisa) but justice.”, *Journals* V, 429)。

1814 年 2 月 6 日付けの手紙には、彼女の作品に対してジョンソン博士とバークが好意的であったことに次のように触れた後 (“She hopes Messrs Longman will permit her to keep the Note of Sir James, that it may be found, hereafter, by her son, in contact with similar marks of favour bestowed upon her earlier productions by Dr. Johnson & Mr. Burke.”, 746 [63 Lower Sloane Street], 6 February 1814, To Longman, Hurst, Rees, Orme, and Brown, Publishers, Paternoster-Row, No. 3 (6—Feb. 1814—), *Journals* VII, 240), しばしば引用されるジョンソン博士が『エヴェリーナ』を称賛した言葉を伝えるスレイル夫人からファニーの父親へ宛てた下記のような手紙が脚注に添えられている。

... So far had I written of my letter, when Mr. Johnson returned home, full of the praises of the *Book* I had lent him, and protesting there were passages in it



which might do *honour* to Richardson. We talk of it for ever, and he feels ardent after the denouement; he could not get rid of the Rogue, he said! I lent him the second volume, and he is now busy with the other two. (*Journals* VII, 240, n. 3)

その他、第7巻には、ファニーが勉強のためにフランス語で書き記した作文の中においても、ジョンソン博士やスレイル夫人について触れている (French Excise Book III, In Retrospect: FBA on Mrs. Thrale, *Journals* VII, pp. 522-46)。

「トレーヴへの旅 (“Journey to Treves, 1815”)」と題された文章の中でもジョンソン博士の言葉を引用している (932. From Tuesday, 20. July, “An hour, says Dr. Johnson, may be tedious, but it cannot be long: 4 o’clock at last struck—and I ran into a vehicle then ready in the Court Yard of the Auberge.”, *Journals* VIII, 490)。

1816年5月10日付けのロック夫人への手紙には、旅行中にジョンソン博士が編纂した辞書を携帯していることが触れられている (989. [23 Great Stanhope Street], Bath, 10 May 1816, To Mrs. Locke, “But while we may be yet travelling, We can only feel it safe in her own guardian hands, our original drawings, too, the Globes & Dr. Johnson’s dictry she will kindly house for us till then.”, *Journals* IX, 126)。

書簡集第9巻に収められた手紙においては、ある邸宅の絵画コレクションが売りに出された際に、ジョンソン博士の肖像画が誰の手に渡るのかについて父親宛の手紙の中で心配していることから始まる (990. [23 Great Stanhope Street], Bath, 7-14 May 1816, To Charles Burney, May 14<sup>th</sup>, *Journals* IX, 131)。

1816年5月14日付けの夫への手紙の中では、ジョンソン博士と語り合った思い出について語られ (991. [23 Great Stanhope Street], Bath, 14 May 1816, To Alexander d’Arblay, “In the room—the Library—in which those pictures were

hung we always breakfasted ; & there I have had as many precious conversations with the Great & Good Dr. Johnson as there are days in the year.”, *Journals IX*, 133), “I should not be sorry to know whom this partial personage may be. Dr. Johnson sold the highest of all ! ’tis an honour to our Age, that ! 360. !—My dear Father would have been mounted higher, I am certain, but that his Son . . .” (*Journals IX*, 134) と続けられている。

ジョンソン博士の肖像画を荷造りすることについて、同年の11月21日には以下のように夫に書き送っている。

1040. [23 Great Stanhope Street], Bath, 21 November 1816

To M. d’Arblay

Your Letter from Dover says you will be forced to make some stop in London—*Pray* write, therefore, to still my poor Nerves from perpetual hope & fear at every knock at the door ! How shall I rejoice if you can superintend the packing of my dear Father’s Bust & the pictures of Dr. Johnson, Mr. Crisp, Sir Joshua ! & Mr. Twining . . . (*Journals IX*, 286)

1817年に入ると、弟のチャールズに宛てた4月11日付けと思しき手紙の中では、“high”という言葉についての議論を交わす際にジョンソン博士を引用し(1062. [23 Great Stanhope Street], Bath, [11] April 1817, To Charles Burney, “Honourable principles would suit—I HOPE !—very many : but *HIGH* seem to belong to my Father’s whole code of NOTIONS, as much as to Dr. Johnson’s.”, *Journals IX*, 365), その議論は1817年4月25日付けの手紙にまで次のように続くことになる。ここでもジョンソン博士による言葉の定義が引かれている。

1065. [23 Great Stanhope Street, Bath, 25 April 1817]

To Charles Burney

*HIGH* is still the only word that paints my Father's Principles ; for whether he had been

‘Poet, Painter, or Musician,

Churchman, Soldier, or Physician,’

his *Principles* would always have been the same, for they were innate, & like those of Dr. Johnson, ADHERED to him in every part of his life & every use of his Reason. (*Journals* IX, 377)

また、11月25日付けの夫宛の手紙の中では偏愛ぶりについてジョンソン博士に言及しながら話される。

1064. 23 Great Stanhope Street, Bath, 25 November 1817

To Alexander d'Arblay

*Cling to those who cling to you ! —*

said the immortal Johnson to your Mother, when she uttered something that seemed fastidious relative to a person VERY partial to her, but whose partiality she did not prize. (*Journals* IX, 374)

1817年から1818年にかけて書かれたとされるメモ(“Notebooks, Memoranda, Diaries for the years 1817-1818”)にもジョンソン博士についての言及が散見される。1817年8月12日(火)の日記に書きこまれたメモには、“V[isit] Mr Jacob to Dinner & spend the Evening—Discourse on poor Alex—Dr. Johnson—de Stael—Chancery-Law—Profession.” (*Journals* X, 940)と一緒に食事をしたことが記されている。

1820 年 11 月頃を書いた異母妹宛の手紙には、亡き父の『憶い出の記』をまとめることについて触れた後で、父親と交流のあった名前を列挙していく中でジョンソン博士の名前も加えている。

1238. 11 Bolton Street, [25]-28 November [1820]

To Esther (Burney) Burney

At the moment we lost our dear Father, I was in too much affliction for any authorship faculties or calculations ; but my internal opinion & expectation were That I had nothing to do but to revise & somewhat abridge his own Memoirs, which I thought would contain 3 Volumes in Octavo ; & to select his Correspondence to the amount of 3 more, which would rapidly sell the whole, in chusing them from the Names of Garrick, Diderot, Rousseau, Dr. Warton, Dr. Johnson, Mr. Greville, Mrs Greville Lady Crewe . . . (*Journals* XI, 187)

1824 年の夏頃の手紙では、“I am quite *consternated*—in the phrase of my revered Dr. Johnson—at this double dealing in the small pox.” (1346. 11 Bolton Street and [49 Upper Park Street], Camden Town [c. 16] August-2 September 1824, To Mrs. Barrett, *Journals* XI, 543) とジョンソン博士に触れている。

1832 年 11 月 20 日に投函された手紙には以下のような二ヶ所の言及がある。

1424. [1 Half Moon Street, *post* 20 November 1832]

To the Right Revd. John Jebb, D. D.

I am so much mortified not to appear more prompt in laying at your feet the only offering that, from *my* Pen I can dare hope might find a nich in your Lordship's Library—

For, —will not the genuine traits of Dr. Johnson plead for its entrance there? —that I am impelled to send off this forthwith to say it will be ready to beg a place before the end of this week. (*Journals* XII, 765)

I say nothing to my *ci-devant* believed Friend, Mr. Foster, who has completely cut me since he had the horror to detect my Gallicisms: nay, even, as I know his eager value for any thing new of Dr. Johnson & Mr Burke; & in return for his Mahometism in the days of his kindness, I devote to him a Book because I think it to my credit—as I am writing to a Bishop—to appear without *inveterate* rancor. (*Journals* XII, 767)

そして、1839年2月21日付けの異母妹への手紙の中でジョンソン博士編纂の『辞書』に言及しているのが、ファニーの手紙におけるジョンソン博士への最後の言及となっている。

1525. [29 Lower Grosvenor Street, 21 February 1839]

To Sarah Harriet Burney

If you have not heard or tried the plan I will tell you a short cut to getting mottoes—Beg—Borrow—or the other thing Dr. Johnsons Dictionary—

& you will find with ease & facility

A word for every chapter

& no trouble

but great pleasure & delaissement

God bless you (*Journals* XII, 962)

そして、遺品リストの中で「ジョンソン博士の胸像」も加えられている。

以上、見てきたことからわかるように、ジョンソン博士は、小説家としてのファニーにとっては彼女の作品のよき理解者であり、特に世評が芳しくない場合にはその判断こそが心の支えとなるような存在であった。しかしながら、終生、手紙の中でジョンソン博士について言及し、しばしばその言葉を引用したり、彼がまとめた『辞書』にも言及していることを知ると、それ以上に、小説家という立場を離れた彼女にとっても精神的に重要な存在であったことが窺い知れる。このように、ジョンソン博士が同時代の人たちに与えた影響力の大きさを、ファニーを通して十分に理解することができるのである。

### 参 考 文 献

Boswell, James. *Life of Johnson*. Oxford: Oxford UP, 1970.

Doody, Margaret Anne. *Frances Burney: The Life in the Works*. New Brunswick, NJ: Rutgers UP, 1988.

Harman, Claire. *Fanny Burney: A Biography*. New York: Alfred A. Knopf, 2001.

Mansfield, Muriel. *The Story of Fanny Burney: Being Introduction to the Diary & Letters of Madame d'Arblay*. Cambridge: Cambridge UP, 1927.

Simons, Judy. *Fanny Burney*. Women Writers. Basingstoke, Hamps: Macmillan Education, 1987.

ジェイムズ・ボズウェル、『サミュエル・ジョンソン伝3』（東京：みすず書房・1983年）。

福原麟太郎、『ジョンソン』（東京：研究社・1972年）。

[本論文の執筆に当たっては、2007年度に受けた松山大学総合研究所特別研究助成による研究成果の一部であることを記して感謝の意を表したい。]